

## 第539回 長野放送番組審議会

1. 開催年月日 令和5年5月10日（水）午前11：00より

2. 開催場所 長野放送本社会議室

3. 委員の出席 ○委員総数 8名  
○出席委員数 7名  
○出席委員の氏名（敬称略・委員は五十音順）

委員長 林 新一郎

副委員長 井口 弥寿彦

委員 浅井 隆彦

委員 笹本 正治

委員 瀧川 浩

委員 武重 正史

委員 南澤 光弥

○欠席委員の氏名（敬称略・委員は五十音順）

委員 加藤 恵美子

○放送事業者側出席者名

外山 衆司 （代表取締役社長）

船木 正也 （常務取締役 編成業務・放送番組審議会担当）

太田 耕司 （常務取締役 報道制作・企画事業担当）

西條 彰浩 （報道制作局長）

早川 英治 （編成業務局長）

浅輪 清 （編成業務局次長 兼 考査部長  
兼 放送番組審議会事務局長）

北澤 輝久 （編成業務局編成部長 兼 視聴者室長）

畠田 哲也 （報道制作局報道部長）

中村 明子 （報道制作局報道部）

4. 議題

（1）番組審議

『 NBSフォーカス∞信州

最期を生きて 「看取り」支える訪問診療 』

令和5年4月28日（金）夜7時00分～ 放送

(2) 視聴者対応報告（令和5年4月分）

(3) その他

## 5. 議事概要

### (1) 番組審議

- ・取材制作にあたった方々の熱意と粘り強さ。真摯に説明を重ね続けられたのではないかと思います。それを受け入れてカメラに向き合ってくれた患者さんご家族に敬意を表します。
- ・お母さんが亡くなったまだ温かい内に、足元にある大きな画面で思い出の場面をお子さんたちはベッドに寄り添って見ていたのは非常に印象的だった。
- ・看取りというものが、家庭でも訪問診療によってご臨終に立ち会えるというのが分かった。
- ・「死ぬんじゃなくて最期の日までその人らしく生きる」とか、「死ぬことは最期を生きること」という一つ一つの言葉のフレーズが印象的でメモを取った。
- ・終末期に寄り添う瀬角医師の取り組みは、本当に人生を掛けた取り組みだと思いい、こういう方がいらっしゃるのだということで、頭の下がる思いで大変にありがたいと思う。
- ・特にコロナ禍でいったん入院してしまうとなかなか会えなかったという状況の中でご本人やご家族の声、しかも複数の声を聴けるということで、大変に社会的に

意義のある番組だった。

- ・最期を一緒に過ごして感謝の言葉を伝えたり話した経験というのが、喪失感から早く立ち直るということに関しても非常に有効で、残された遺族の日常を支えていくのだということが実感として映像から伝わってきた。
- ・出演者の信頼、理解を得ながら敢行した長期密着取材実録で、闘病とか死に顔まで映した映像を通して、看取りという多面性、多様性のある社会的テーマに真正面から挑んだ意欲作だった。
- ・誰にでも必ず訪れる死の問題と最期の時間の過ごし方。医療と看取りとの問題など身近で大切ではあるが、非常に深く重いテーマに今回取り組もうと決意されたきっかけや理由などをお聞きしたい。
- ・今回の番組全体が私にとっての人生そのものを考えさせる、今を考えさせるというようなものだった。
- ・治療の選択も含めて残された時間をどう過ごしたいか、意思表示できるように準備すること。ひいては自分の健康と今をどう生きるか考えていくことが大切な問題であるということを静かなメッセージとして発信することができていた。
- ・ご家族にとっても一緒に時間を過ごすことで、弱っていく姿に触れながら少しずつ心の準備をしていくことが別れの悲痛を乗り越えて、そのあと生きて行く力に繋がっているように感じた。
- ・県内で最も医療体制が充実していると受け止めていた松本地域で、訪問診療専門の医師は瀬角さんしかいないという現状は、在宅ケアを望んだとしても支援できる体制が整っていない地域が県内には数多くあるという可能性を示唆していた。
- ・今回の大きなテーマの中に家族というものがあるが、この医師の家族はどうなっ

ているのか、医師の生き方とその家族との関係を知りたいと思った。

- ・小林聡美さんのナレーションが感情を抑えて非常に冷静に伝えていたので、それが番組の狙いを引き立てて、感情に流されるような番組にもならず効果を発揮できたのではないかと思った。
- ・小林聡美さんの説得力のある歯切れの良いナレーションがタイミング良く挿入され、正視し続けるに努力を要する場面が続く番組の中で過度に感傷的、深刻にならず、番組テーマに真正面から見て正対し、逃げずに視聴することができ、たいへん適役な起用だった。
- ・ご臨終の後のご遺体がドキュメンタリー番組であそこまで長く映ったというのは初めて見て衝撃だった。
- ・家庭でこういった環境を作って看取りをされた方というのは増えてきたと言われるけれども、どのくらいの割合があったのか。また実際どのくらい増えてきたのか。
- ・瀬角医師がどんな悔しい思いをして、どんな課題を克服しないとみんなが希望しても看取れるようなことはできないということについてスポットを当てたような番組を制作する機会があれば見たい。
- ・在宅介護の医師だけではなくて、どういう仕組みで在宅介護が成り立っているのかをこれから掘り起こして、厚みのあるシリーズものになっていけばいいと思う。
- ・誰しも死は訪れるが、終焉の状況というのはそれぞれ違い、実に多くの人がいろんな仕事をして支えているという状況にも光を当てていただければ、今後良い番組ができるのではないかと思う。
- ・ご本人とご家族が病院の医療関係者とか訪問診療関係者等と相談を重ねながら、この終末在宅医療を選択するに至ったプロセスとか、葛藤といったものも取り上げてリメイクされても良いのではないかと思った。

- ・訪問診療の瀬角医師の生き様や矜持、地域での活動に、もうちょっとフォーカスした番組を見てみたいと思った。
- ・瀬角医師の死生観や人生観、自分の使命感をもっと報道しても良かったのではないかと感じた。
- ・延命治療、緩和ケア等の関連用語とか、医療とケア、訪問診療と往診など関連制度の違いの説明、或いは多くの選択肢の中での訪問診療医師による終末在宅医療の位置付けというようなことについても、触れていただけたら良かった。

## (2) 視聴者対応報告

資料に基づき、令和5年4月分の視聴者対応について編成局より報告を行った。

## (3) その他

### 配布資料

- ・第538回番組審議会（令和5年4月）議事録
- ・視聴者対応報告資料（令和5年4月分）
- ・モニターレポート
- ・BPO報告（NO.250、251）
- ・民間放送（第2214号）

以 上